

目的 被服は個人の嗜好や感情により選択し着用される。特にその着用動機となる色彩の重要性はよく知られているが、被服の美的効果を高める配色の面積効果は、これまで十分な研究が行われていない。そこでこの観点から、平面図形に2種類の模様を描き配色と面積比について調べた。さらにこの結果を基にして被服にデザインし、人体に着用した場合について検討を行った。

方法 被服の模様は3色配色のストライプとチェックを大、小に変化させ、面積比は、 $1:1:1$ 、 $2:1:1$ 、 $6:3:1$ を選んだ。これらデザイン画を無彩色段階で塗り分け、配色は赤、黄、緑、青、無彩色を基本色とする14種を配色シミュレーション装置に挿入し、陰影装置を使用して材質感を呈するようにした。被験者は本学学生37名が、5段階評価法で判定を行い、因子分析を用いてイメージを検討した。そして分散分析、数量化I類により配色と面積比、および模様の大小による関係を明らかにした。

結果 因子分析の結果、ストライプにおいては評価、活動、暖かさの因子で表され、チェックはこの暖かさの因子が力量の因子に変わる。要因分析の結果、配色は赤、青、無彩色を基本色とする同等、類似の関係が評価の因子を高め、赤、黄を基本色とする類似、対照の関係が活動の因子を高める。面積比は、 $2:1:1$ が最も評価の因子に作用し、ついで、 $6:3:1$ 、 $1:1:1$ の順となる。活動の因子は $6:3:1$ 、 $2:1:1$ 、 $1:1:1$ の順に作用した。これらには模様の大小による影響も認められ、被服をデザインする際には配色と面積比が重要であることが明らかになった。